

松岡正子著 黄英哲・陳奕汎監訳

青蔵高原東部の羌族與蔵族

——二〇〇八汶川地震前後の人口流  
動與文化変遷

(台北・允晨文化、二〇一二年四月、八五九頁)

チャン族は、殷代の甲骨文字に登場する古代「羌」の末裔とされ、中国歴史上、最も古い民族の一つである。しかし、かつて中国の西北及び中原にも広く分布していた古代「羌」は、やがて他民族と融合し、一部がチベット高原東部の高山峡谷地帯「蔵彝羌走廊」を南下して、四川西部で現在のチャン族や四川チベット族(ギャロン・チベット族や川西南チベット族諸集団)を形成した。彼らは、漢族とチベット族という巨大民族のはざまにあって、チベット語とは異なるチャン語系言語を話し、チャン族はシピ(シャーマン)を中心とした独自の信仰をもち、四川チベット族はチベット仏教を篤く信仰している。

二〇〇八年の汶川地震により、チャン族と四川チベット族は生活環境に甚大な被害を受けた。復興活動のなか、村の解体、村民の転居に伴う人口の移動が彼らの生活様式に大きな変化をもたらし、人々の価値観も次第に「近代化」した。その後、消滅の危機に頻する言語と文化に対する保護が重要な課題となつている。本書は一九八〇年代後半から著者のフィールドワークに基づき、震災の前後におけるチャン族と四川チベット族の文化の変遷を記録した研究である。調査はこれらの民族の主な居住地である四川省の阿壩蔵族羌族自治州、涼山彝族自治州、甘孜蔵族自治州、雲南省の麗江市、怒江傣族族自治州等の広範囲にわたって実施された。原著の日本語版は二〇一七年に発行されたが、二〇二二年に発行された中国語版の【論文篇】には四本の論説が新たに加えられた。

本書は、汶川地震後の復興活動に伴う諸問題、とりわけ文化遺産の継続性に関心をもち、家族・親族関係、日常

生活、経済条件、年中行事などの側面から、政府の思惑と住民の意識そして第三者である研究者の立場から見つめた。この試みは、本書の研究対象であるチベット高原東部少数民族の問題だけではなく、敷衍すれば全ての中国の少数民族、さらに世界範囲で起きているマイノリティ文化に対する保護に意味を持つ。従つて、本書の位置づけは、歴史的・時代的視点からチャン族とチベット族の言語的・文化的類似性と特殊性を捉えた内容に止まらない。

震災により、人的資源の流出は無形文化財の存続を脅かし、物的財産の破壊は有形文化の消滅をもたらし、急進的な文化の消失で人々に危機感を持たせ、救済を図ろうとする。その一方で、都市化、近代化、市場化、国際化が進むなかで、文化が漸進的に画一化されることに対して人々の関心は薄い。本書は急性的な「文化の死」を通して慢性的な「文化の死」に対する警鐘を鳴らした貴重な一冊といつても過言ではない。

(金湛)